

金相寺 寺報

遇

～ぐう～

Encounter magazine "Guu"



ブッダガヤの菩提樹

3月

March 2015

No. 8

かみこ くじゅうねん
紙衣の九十年

親鸞聖人はおよそ八百年ほど前、京都に誕生され、九十歳でお亡くなりになりました。

その人生を通してお伝え下さったお念仏の教えは今もなお、人々の心に響き、生きる勇気と力を与え続けています。悪人正機説や肉食妻帯されたということで有名ですが、一体親鸞聖人とはどのような方だったのでしょうか。

ここでは親鸞聖人のご人生について共に触れていきたいと思ひます。



● **弾圧と流罪**

吉水で法然上人が説かれていた専修念仏の教えは、年々信者が増大していき、京都の洛中においても有名な存在となつていきました。法相宗、天台宗、真言宗をはじめ、すべての旧仏教教団の僧たちは、専修念仏の教えが巷に広がることに驚異を感じ、批判をするとともに専修念仏の停止を朝廷に訴えました。

そして一二〇七年二月、朝廷は法然門下に対する弾圧を開始し、法然上人は土佐へ、親鸞聖人は越後国国府（新潟県直江津市）へ流刑となりました。僧籍も剥奪され、親鸞聖人は越後の国での再出発が始まりました。親鸞聖人はご自身のことについてほとんど語られることはありませんが、唯一ご著書の『教行信証』後序において、この時のことを次のように書き残されています。

これに因よつて、真宗興隆しんしゅうこうりゅうの大祖源空法師たいそげんくうぼうし、ならびに門徒数もんたすう

輩はい、罪科ざいかを考えず、猥みだりがわしく死罪しつみに坐つす。あるいは僧儀そうぎを改めて姓名せいせいを賜たまうて、遠流おんりゅうに処す。予はその一ひとなり。しかればすでに僧にあらず俗にあらず。このゆえに「秃とく」の字をもつて姓とす

この時、自らの立場を表明して「非僧非俗」と称されています。もはや国家によって認められる僧でもなければ、国家権力を至上のものとして尊ぶような俗でもない。法然上人の導きによって真実の仏道に帰依し、念仏に生きる者としての一生が始まりました。



親鸞聖人ご流罪の地
居多ヶ浜（篠画伯作）



【土 徳】

仏典の中には蓮華をはじめとして、多くの植物の名が見られるが、取り分け仏教徒にとって大事な聖木とされる樹木がある。無憂樹、菩提樹、それに娑羅樹である。釈尊の母君、マヤ夫人が、ルンビニーの花園で無憂樹の小枝に手を伸ばされた時、釈尊は誕生せられた。時に四月八日降誕会である。また釈尊は三十五歳の折、ブツダガヤの菩提樹の下で真実に覚められ、開悟せられた。時に十二月八日成道会である。成道後四十五年の間、伝道を続けられた釈尊は、八十歳の高齢を迎えられ、クシナガラクシナガラの沙羅樹林において入滅せられた。時に二月十五日涅槃会である。

ところで、八十の御高齢となられた釈尊は、王舎城の靈鷲山を北に向

かつて旅に出られ、パーヴァーという地で鍛冶工チュンダの施食を受けられ、その施物を食したことで重病に罹り、苦しみながらもなお、旅を続けられ、クシナガラまで来られて疲れた身を休めるべく、随行の阿難に床を敷かせ横臥せられ、静かに入滅せられた。そこは沙羅樹林であったが、釈尊の入滅と同時に沙羅樹林が白色となり枯死したとされ、その有り様が白鶴すだが集くが如く見られたところから、釈尊の入滅を鶴林ともいわれる。



釈尊ご入滅のご様子

このクシナガラから更に北へ向かうと、釈尊の故郷、迦毘羅衛に至る。八十の老体にもかかわらず靈鷲山を北に向かつて旅に出られたのは、人界の生の尽きるを自覚され、迦毘羅衛が懐かしく思われての旅立ちではなかったのだろうか。

先日、二十五年ほどご縁をいただいた八十五歳になるK氏が寺へ来られ云われるには、「このところ故郷へ帰りたいたいという思いが募り、近々福岡へ帰ります。就いては永いお付き合い合いました、これでお別れします」と帰って行かれた。都会に暮らす多くの人たちが盆暮れに故郷へ帰省するのは、言い知れぬ思いがあるからであろうか。

石川啄木は「かにかくに 渋民村は恋しかり おもひでの山 おもひでの川」と詠っている。小学唱歌の「故郷」には「兔追いしかの山 小紺つりしかの川」と詠われている。人が故郷に心惹かれる要因は、山や川といった自然にあるのであろう。

私事で恐縮するが、愚生は東京の下町で生まれ育った。勿論山などなく、近くに溝川が流れるといった人工的建物の密集したところである故に、故郷を想い懐かしむといった心は更々ないのであるが、ただ歳とともに懐かしく心惹かれるのは、俗に「真宗王国」といわれる浄土真宗の伝統が日常生活の中に確りと根付いた地域である。年に一〜二度、そのような処を尋ねるのだが、昨年は山口県の仙崎へ出掛けた。勿論童謡詩人金子みすゞに値う為である。萩の街から日本海沿いに西へ二十キロ程行った処に仙崎はある。鳥取、島根、山口といった山陰地方は、浅原才市、足利源左といった有名な妙好人の出したところで、浄土真宗の盛んな土地柄である。新山口駅よりレンタカーを仙崎に向けて走らせた。車を降り、仙崎の町を暫く歩いて驚いた。驚いたというより感動を覚えた。漁師町とはいえ、整然とした町並みが歩くだけで旅人の心を落ち着かせてくれ

るではないか。町全体が金子みすゞの詩を詠い上げていると感じるのは愚生だけであろうか。仙崎の多くの人金子みすゞと同じ心情を懐いておられるのだと思えてならない。仙崎は武家の厳格さを感じさせる萩とは違って、庶民のあらゆるものに「いのち」を感じとっていく、優しく温かい人々の心が滲み出た町である。この様な土徳溢れた土地で、金子みすゞは生まれ育ったのである。金子みすゞの詩は、浄土真宗の教えをくみとったみすゞの心から絞り出された、何人をも感動させずにはおかない生きた詩である。みすゞの詩情に値うことが出来れば、何人も



金子みすゞ

人としての健康な心を取り戻すことが出来ると愚生は信じてやまない。みすゞの祖母は大変熱心な真宗門徒であったという。その祖母に連れられて幼い頃からみすゞは寺参りをしていたとのことで、法話は分からないながらも地膚から染み込むものがあつたのであろう。また、みすゞの生家である文英堂書店の二階では、「歎異抄勉強会」が開かれ、みすゞは参加者へのお茶出しを手伝い、聞くとはなしに聞いていた浄土真宗のみ教えが、感性豊かなみすゞの心に染み込んでいったものと思われる。

「お魚」

海の魚はかわいそう

お米は人につくられる

牛は牧場で飼われてる

鯉もお池で麩を貰う

けれども海のお魚は

なんにも世話にならないし

いたずら一つしないのに

こうして私に食べられる

ほんとに魚はかわいそう

『金子みすゞ全集』

この詩を読むと愚生は『改邪鈔末』にある「^{それがし}某閉眼せば賀茂河にいれて魚に與ふべし」という親鸞聖人のお言葉が思い出されてならない。祖師聖人のこのお言葉をみすゞも寺の法話などで聞き忘れ難いものになっていたのではないのか。その思いがこの詩を生んだと思えてならない。

「私と小鳥と鈴と」

私が両手をひろげても

お空はちっとも飛べないが

飛べる小鳥は私のように

地面を早くは走れない

私がかからだをゆすつても

きれいな音は出ないけど

あの鳴る鈴は私のように

たくさんな唄は知らないよ

鈴と小鳥とそれから私

みんなちがってみんないい

『金子みすゞ全集』

浄土真宗ではよく一如平等の世界

を『阿弥陀経』にある浄土の蓮池の譬喩を通して説かれる。「お浄土には七宝の池があり、池の中には色取り取りの蓮の華が咲きみだれ、青い蓮は青い光を、白い蓮は白い光を放つて微妙香潔なり」。白蓮華が自慢したり青蓮華が卑下したりといったことは全くない。みな色は違えど平等に光り輝いていると説かれてある。



金子みすゞ記念館（金子文英堂）

吾人は他人を比べて慢心を懐いて
みたり、卑下し悲しんだり、これ程

愚かなことはないとの教えである。人間は十人十色、姿も能力にも違いはあるが、何人も与えられた人間の「いのち」に於いて平等なのだ。自分に与えられた分限を尽くして生きるところに光輝く人生があると。それを金子みすゞは「鈴と小鳥とそれから私、みんなちがってみんないい」と詠い込んでいる。

仙崎は何度でも訪れたい処である。仙崎に限らず愚生にとって浄土真宗の伝統が染み込んだ地域は、生まれ育った土地ではないが、心の故郷であり、懐かしく有難い処である。これぞ土徳と云うものか。

合掌

成田 宣信（金相寺住職）



正信偈勉強会 学習報告

【原文】

道綽決聖道難証 唯明淨土可通入
萬善自力賤勤修 圓滿德号勸專称

【読み方】

道綽、聖道の証しがたきことを
決して、ただ浄土の通入すべきこ
とを明かす。

万善の自力、勤修を賤す。
円満の德号、専称を勸む。

【意訳】

道綽禪師は、聖道門では覚ることが困難であることを明らかにして、ただ浄土門のみが通りやすく入りやすいことを明らかにされた。様々な善を自力によって勤め励むことを退けられた。欠けることのない徳を具えた名号をもっぱら称えることを勧められた。

自分の力では仏に成ることができない凡夫を浄土に迎え、そこで仏に成らせようとするのが阿弥陀仏の願っておられることです。しかも、煩惱に覆われて、自分の力では浄土に往生する原因を作れない凡夫をそのままでは往生させるために、阿弥陀仏が施し与えておられる「南無阿弥陀仏」を、そのまま受け取って称えるように勧められています。

「万善の自力」というのは、仏道を成し遂げるために、自分の力を信じ実践しようとするさまざまな修行のことです。道綽禪師は、そのような修行に勤め励もうとするのは誤りであるとして、それを退けられたのです。

（中略）

「南無阿弥陀仏」という名号は、本願力という、私たちからすれば他力となるはたらきによって、私たちに回向されているものなのです。阿弥陀仏の願いとして、施されている名号ですから、円満なのです。他力

にしたがう念仏だからです。

（『正信偈の教え・下』本文より）

所感

座談会の中で参加者の方より、称名念仏とは、自分で称えているのに、なぜそれが阿弥陀如来から回向されているということになるのか。よくわからないというご質問がありました。

南無阿弥陀仏というのは、阿弥陀如来の願いが形となった名前なのです。その願いはすべてのものを皆平等に救い遂げたいという願いです。私は竹中智秀先生という方から念仏には称名のほかに聞名ということがあるのですと教えていただきました。阿弥陀如来の名前を私たちが口に称える（称名）ことを通して、その称えた名号を聞き、その願いに触れさせていただく（聞名）ということが大事なのです。そこには今ここの私にははたらきかけられている大いなる願いがあるのです。



副住職の 日々の出会い



● 青年会・子ども会合同開催 報恩講のご報告

去る去年の十二月二十六日、青年会・子ども会合同で報恩講をお勤め致しました。

今年のお話は金ピカキッズについてもご家族でご参加くださり、お話や楽しいゲームをしてくださる坪内秀樹先生にお話しいただきました。



子ども達に「人と人との間を生きる」ということについて語りかける坪内先生

お昼は境内でけんちん汁と炭で焼いた熱々のお餅を食べました。みんなの食欲にびっくり！



作りすぎを心配していたけんちん汁もほとんどなくなりました♪♪

今回は年の瀬の開催ということもあり、またインフルエンザなどが流行っていた影響もあり、いつもよりこじんまりとした会となりましたが、またいつもと違ったなんとも言えない雰囲気温かく楽しい会となりました。ご参加くださった皆さん、本当にありがとうございました。

次回の子ども会は四月三日に「花まつり」の開催を予定しています。是非有縁の方々お誘いあわせの上、お気軽にご参加下さい。皆さんにまたお会いできることを楽しみにしています。

今後の予定

法要

三月二十一日 春彼岸会
七月十六日 孟蘭盆会
九月二十三日 秋彼岸会
十一月八日 報恩講

勉強会など

四月三日 午後一時～
子ども会花まつり

※詳細はホームページをご覧ください

四月四日 午後二時～

正信偈を学ぶ会（輪読・座談会）

※以後、偶数月（六・八・十・十二月）の

第一土曜日に開催予定

毎月一回 仏教青年会

※毎月開催日等、詳細はホームページを

ご確認ください。電話・メールにてお問

合せ下さい

予定は都合により変更する場合がございます。詳細は随時ホームページをご確認いただくか、電話・メールにてお問合せ下さい

編集者雑感

つい先日、朝日新聞の「天声人語」に次のような文章が掲載されていました。

「使用頻度の高い言葉ほど手垢に汚れ、切れ味が鈍麻し、意味が曖昧になる。そう言って井上ひさしさんがまず挙げていた言葉が「平和」だった。（中略）「平和の大切さ」といった紋切り型も注意がある。使い勝手も耳あたりもよく、とりあえず人をうなずかせるのに便利だ。しかし往々に、そこから先の思考をとめさせてしまう」

この文章を読んだ時、まさに私自身に突きつけられた言葉のように感じました。宗教者として「いのち」に関わりながら、当たり前のように「いのち」ということについて話をしています。自分自身ただけだけの重みをいただきながら使うことができているでしょうか。仏教で語られる言葉一つ一つもまさに同じことで、そこで語られる言葉が私に一体何を訴えかけようとしているのか、その意味を深く考え、いただきながら教えを聴聞しなければならぬと改めて気付かせていただきました。

合掌

『遇くぐう』第八号

発行 浄土真宗 霊苔山 金相寺
副住職 成田 宣明

〒252-0328

神奈川県相模原市南区麻溝台726-1

Tel 042-778-2879 Fax 042-711-8257

e-mail konsouji@aria.ocn.ne.jp.

URL http://www6.ocn.ne.jp/~konsouji/

発行日 二〇一五（仏歴二五五八年）年三月一日